



俳諧御傘
九

特別
~5
6041
9





56-4082

神代卷



凡

名神

非若此新式如比也
亦あゝぬとへま日

乃神位者乃神さくくく

名はよあゝぬとへま日

そあゝぬとへま日

神さくくく

勅法中そは名をを唱とき

去日大明神とくくく

よあゝぬとへま日

とへま日

とへま日

て若あゝぬとへま日

字よのこをきく

名木のあひ 秋に名草を
くわくひをこ

目 只一うそめうきめのる
よ一本のめひかよあはし

淵よいんかめニこくと教へよ

よそてもひ肉るるへーうき

めよそあめの目又本の目集る

のめ山椒のめ^あるるのつこあ

いこのめ田置のめるる乃類

あわらねよ連のやうふるあ

とれは排をはずりてさるる

ぬもめしお詮よそあもうき

めも人かよよま目のまひわ

よ一はくつと回あるへーそのか

り人まこるるして用らぬ乃

字ハ人か目よハせをきく

よ一はくつありとらぬをーあ

し人か心鳴のめまかあめハ

ハわわとあふしん新式ー

のこぬ拾拾教とくおくおせハ

まもわけまね乃庫ーよあま

多くおあまへうくーあま

あうくゆましあうくーあ

しとくへ懸座の宗道派

ふこくくひゆふあーあ

誤ありてもくくーくぬるこ

めーあめくやのあくの洞行

よ一はくつあり淵よハ一

よあまの面をゆふるー

あはめわいせとら洞のわう

二句まわりのあ

へんしりくすりも物合を
 白の邪魔と書して正文を
 見させ居るを庭と物と別
 くの物とわけて居るを新
 式よ正室の居る所のまはれ
 たる庭とわけて居るを庭
 多り居る人家乃物たり
 物と人家よあつてさう
 物と云ふは庭をさうて庭乃
 留字と云ふは庭のまはれ
 事しと云ふは物も新式
 小得りしりか怪るはむじ
 多し物もさうなり新式を
 りくは初定をさうむじよ
 られて物とわけて居るは
 新式を可なりかむじ

るは庭可なり好

漆 只一名のし一排よ二名は
 一しと云ふは庭の漆と

いと乃内之水の字よ不端

名 名ありありと云ふ二名

中 中ありありと云ふ二名

誰よ二名二名一又名あり

二名ありありと云ふ二名

ありありと云ふ二名

小三ありありと云ふ二名

ると云ふ二名

五生忠孝ありありと云ふ二名

ありありと云ふ二名

ありありと云ふ二名

ありありと云ふ二名

初終の初 月を夜とわくくして
終るを滅とおもふくは竜の初
不可有南初とわくくはあふ
乃邦不可有 系初邦 駢
上京 下京 四初 遷初 初系
平安政 洛陽 洛中 洛外 洛
東系 西系 出の初と一もく
つとわくくして洛初をくもく
九重と 九重とわくくは初よ面を始
九重不可有 乃よ面を始
大を 洛中 大表 百表 平井
乃在 大内山 仙洞院の出来 見
とりの洞院の 初屋乃山
あふ初 九重よ七句まへ
ひ内おも初よ洛と漢より續
との系つらめ初らあふ人
月の初終の初とつと

初よ初を始る月を竟官
るく終よつと別の初の初
よきこ終る初もくく
くく初よの初ひるの初も初
とくく人とも 國府と中と
やせ初よ付くも不若りや
の表おも初の宗通初平よ
可く初もく 京初洛の三よの
初の初よれと終よ漢く
もよよ初を可く始る

初よ 古の二初とあわくあ成
あく初の初と只の初
と初も不可始初よ終の初
と初を始とあふ初
七句と初よ志初あ初の初
初の初とあふ初を始る

ありと連よりけり
此乃倍鏡を流く
乃字ぬきとさ
たしをんあんきま
これけさよ
去り字ぬき
さるるし面を
二の字ぬき

二の字ぬきと鏡

あるれし流の字よ
まの同と文
もろんそ流の字よ
や答と音野
子火入流の字よ
態野と鏡現を

流の字よ
まの同と文
もろんそ流の字よ
や答と音野
子火入流の字よ
態野と鏡現を

見られ
白同と文
ぬと成海ぬ
各言余の
の三句去ぬ

ぬと成海ぬ
各言余の
の三句去ぬ
白同と文
ぬと成海ぬ
各言余の
の三句去ぬ

菊奈系
系は二月中辰の日

方あり
秋と連よ

乃字人倫よ
いやうと

らんまろ 撰まろふまろ 清二白
ま

御清 禁中の玉階より成
おろし清乃字をとか

おろし清乃字をとか
おろし清乃字をとか

おろし清乃字をとか
おろし清乃字をとか

おろし清乃字をとか
おろし清乃字をとか

おろし清乃字をとか
おろし清乃字をとか

おろし清乃字をとか
おろし清乃字をとか

おろし清乃字をとか
おろし清乃字をとか

おろし清乃字をとか
おろし清乃字をとか

あつく 之白水のぬらむ
まき清乃ぬらむ

まき清乃ぬらむ
まき清乃ぬらむ

まき清乃ぬらむ
まき清乃ぬらむ

まき清乃ぬらむ
まき清乃ぬらむ

まき清乃ぬらむ
まき清乃ぬらむ

まき清乃ぬらむ
まき清乃ぬらむ

お後小 清乃ぬらむ
清乃ぬらむ

清乃ぬらむ
清乃ぬらむ

清乃ぬらむ
清乃ぬらむ

酒去 交しつらめ強りりめるせ
いれくも交るり

うのち物 無きよ云押の字不
端と云説め何物し

二句くみ句り二又句よ治定をも
角一ひじい小籠と云ハ調の一
字と云のさと漢と云云ハ此の
字をまへくくまり物多し
らふまとハ調小付く味下
まて此字正字し酒をみふ
あしと云よいらも酒會一酒を
三寸と云り正字ハ多時春之
ハ風寒人か身と三寸とけく
吹と云らり名もゆりしきも
此意を去ら又あまし此の字
を射ハ汁一物をさるし

物と云大書へ指物をPせし
あり居うよ治の字よき
ててちる物も所る義りし存約
分但其産の家通次片よな
さる身りのし

道とく 二句し

三嶋 揚列 豆列 每國小わり
よ山敷よあし次但揚列
乃のあ通し豆列とあ通しあし

汀 二と二の若はなわ

みくく 幣は乃字に不端
丸はくく 幣と云
くく 續よ子細まへしとね

と清の字は付句を可成歟
幣の神の業飾りて海にます
社壇と曰ふは社
神のとらふことと事しよの神主
乃成よみくことひくこと
神の人作りへしと事しよの神
と事しよの神と事しよの神
ともわめく清乃字をこと
付らふは事と事しよの神
乃字よ不備と事しよの神
神也と事しよの神と事しよの神
一と事しよの神と事しよの神
付是不廢業と事しよの神
つててらふも清乃字よふり付
と事しよの神と事しよの神

みく

帝と事しよの神の字付く
も不若石法也門と事
りけし二つ云と事しよの神
事しよの門は面をて極りて
つともいれと事しよの神
よは清門と事しよの神
て字の清をくりて事しよの神
本根本を大表乃物なり
つは乃内は海と事しよの神
又よと事しよの神と事しよの神
ともと事しよの神と事しよの神
るり事しよの神と事しよの神
う事しよの神と事しよの神
神は帝の字と事しよの神
と事しよの神と事しよの神
さよへ事しよの神と事しよの神

字よ女も不埒をもし始を
印を責然しく付らるまの
看るれも構らるまのまよ
定ぬれもむさうさぬ
よ新式おひのありそれ乃
あつたやうのぬらひ多ゆり
い道理あつみしよ門のま
も二句まふしくつたうなる
初に母姓棄てて字おし門の
字よも一向不埒付くも不
昔あまをきくもさう合
多く成るゆりもぬらひに
え名を清浄と云ふなり付
ゆり約と云はるなりなり
あふぬらひ先宮よ流乃字
屋乃字ぬらひも不埒連

よま嫌もの多きことさ
字よるれし大恥乃復ハ
ぬらひぬらひ小定らるる
ゆるぬらひなり

ふらぬもの

初し語も
去れよ清の字

よ二句まさわらし初おも法
おし皆二句去て成

見

社よと去れよ一切の清
乃字よ不埒一説あり二

句まさきまらしくよみしり
老おまへくも連袂作ら
そこの不埒まらうひやうり
社よと去れ社よある社
示ふこ又右をく口成よすら
見こよこは社乃字なり

字二句婦ふと無言よわらふ
得る只月白針婦ひくく子
かり

御あふ小 初乃字二句さり
かり

みさき ころころ東若然乃
と改留沛乃字さ

見らぬ山 ころころ浦さ
見らぬ山さ

いひくく縁と地白よころ魚
しとさ

水よ ころころころころ
みさきりみさき

皆と句を江と物さうら二
句さみさきりころ婦ふ

ふらふのわと小 写し繪
筆文何

まも地びけりかろんく
筆さよありい内あ筆さ

書物のは筆の是名さり
又字の事と筆をさよ筆と

るわと不さ符回さたわ写
繪さ不書又乃字も悉縁の

又情れ筆筆とさりと虫極
小の形さ筆乃むの在文さ

實文推又學者おの類ハ
不書いけさも依る筆さ

道小 爰路悉路さとの路
ころ二句さり山路さ

乃爰路よいさ白灘さころ
むりこあまささ路らさり

等乃亦も路小よ二句を
九折し乃乃通るよのり
歩るるぬよ燈路山路を
流るる句を

雲小 みぞれ
鳥面を場ふ但排よ
七句三篇毎いふ句を

みづら子に 或鏡よれを始
縁乃字不嫌

とらへりぬ夜をよあし折
とらへりぬもつり付事
つりぬい面を下場吹上
なき者の又折よ字に
ささやうし小児をこしり
こと付らういれ事さ
見とらと云物の起り各
交通の極るるれと安よ

あしはさ次付くも不若と
三鏡を下月し

乃あゆり あしはさ
連懐但句神
よしうんさ

乃あゆり あしはさ
蝶乃神あ

可云わりのよのよあしはさ
無言い條を去場よもあ
寸子氏連秋神の自実
と心もよ木食上人乃
流のよ慈悲のあゆり
後とらあしはさ
まふとねよしり
あしはさ

ゆり藤を小虫るねんがと
つひくうしとわあさ海しと
波はた大力を現とれい虚
勢よるら小身を現す
し芥子よ入とまも一と終り
もゆり虫死をさし物まらぬ
群衆よい金銀ものあそふ
大力も敵もまんまよ果と
くあま情もゆり人の目よ
らいさふ忠とく身家の二字
を付くうしと一と金とんや古
款よい非情の果木のむと所へ
力と流るる事ゆりさ後松の
沛勢よもわりのうとらんもね
く向くくもあうくおらくろた
笑を月夜あうくしと

みろふ ありとんちんくうん
きとらちよ折後と二句と
あり人怪よつり但橋うり後
と物とふい不端と言ひ
い折らと寸とまの人も
乃又文字折見と寸と
やと一と付とくまみとあり
すももねしきあうく二句
まくと二句とまよ海と寸と
小雲鑿をい折むとまよ
もと折心ありと二句と
あ付白をいの句と折同意
まると二句と折もい一と折合
くは不可と定

なまこゆき あしひつこふまに
白きまわり

御前 正月十五日百官こ
さくくを勤まをり

水口まわり まきこふたよわう
まき

こみ まき
まき

み まき
まき

い まき
まき

水 まき
まき

一よハあ 新草一よハあ
しきハ橋をり とまき
世の方あ く川よ流
ともく ねとら
ち さ

養虫 雑こね
養よ

志

町 秋よ一冬よ一初町
も 冬よ
春の町 ぬの町
露乃町 ぬの町
冬 露乃

新し又山志をせこと植木と云
しりもあわさる難しと云り
畑こりのこ交たり穀と云
も交しかを所しく難し遠
り古交し干麻 菜の麻
け二も難し或いはと云り
穀或いは清しくと云り
くくし多も秋に生穀
二句麻田の内は麻 鹿嶋
乃若ふ乃若は田乃亦之生穀
もあは次及云麻乃交り
面を三遍り霜踏麻あは秋
下りえ 下崩と云い
の庭りも亦の文字をへ
たり植木よ二句まじり此下

下りえ

崩やね乃下崩も同方と云
植木り二句菜木の若あは
りしり植木よ二句火の下
崩も若ふ乃交しと云の
くのあは丸りの新
或は下崩と云い植木
よ亦紙を焼くあは野り
原と云へくも下崩と云
詞まよ成と云はぬと云
菜麻らん木麻らん何れ
若ふもあはまよあは
生あは植木あはと云
下崩と云詞をまはらと云
あはり野り原と云はら
と末世の小竹のあはらと云
大地をくわきしりあはらと云

乃若傍岩のしるし海登のり
此山峯海川の多よも下
崩をてあとのるちよ整この
原うるまふいしれきりきと
云流をうりく思成統るれ
し佛よ六部武のしるし下前
こ計もとて人交しとね定約
るしは流敷あふあし流

下るよ

下は下紅葉赤れ詞
しよ山く舞りあてふ

よの文字もそとてとて人しるし
ふりしき言扱よあまこも
るくあしとくしりしりさるし
は下の字は佛をきく人しるし
雲あらしむしりしりく自れんあ
学あき佛しりる

あこのろ字

連は形を始と
あれし佛よハ

面を可下始けと替入よ續
ても一産よふしあしりしりし
てもは肉成るし同云あ
列んあしりしりし一白てあし
吾云あことあわりあもも
あしりしあまろくもけと替入よ
あわりしき言お務よ一産よ
はあ乃内ふ句ありしとて知
裾野の 下野とくけたあま
あしりしりし衣の裾のことそ
野よ形を始下の字より
すそ野衣のすそ三句云
なりしりしりし裾乃一字
あらしりし二句あし

下海

長敷と云く乃帯と
折を三編細の字

折を替くとあるべし

ト細と云く名取乃下細乃

実又と云くこの衣敷よ

わと云くひもきん三句の心

なり下細と云く下海の

実取乃下細と云くはく

と云くこの衣敷と云く

下海と云く下代帯と云

折と云く乃既と云

あつ約 山の内よ人をまの
事しと云くわ

志のふくく見ん
船よハ
右名よ

も水と云く二句と云くわ

い詞と云く信又と云く

思ふと云く連ふよあ連と云

よい句編と云く名と云く

と云く不字者と云く名と云く

婦と云く連と云く離と云く

と云く今と云くこれと云く

と云く今と云くこれと云く

又思ふと云く名と云く

名取乃信又と云く文字各と云

たれと云く不可と云く名と云く

と云く名取乃志のふ乃里と云

と云く結と云く思ふと云く

と云くわと云くれと云く同と云く

と云く名と云くのふと云く親よと云

と云く名と云くのふと云く親よと云

あふれ字

あふれ二只二つこ
田連よあり排

よあ思辱乃衣思あ
あふれよあ思辱乃衣思あ

あふれ車

あふれ思辱乃衣思あ

あふれ思辱乃衣思あ

あふれ

あふれ思辱乃衣思あ

あふれ思辱乃衣思あ

あふれ思辱乃衣思あ

あふれ思辱乃衣思あ

あふれ思辱乃衣思あ

若

あふれ

あふれ思辱乃衣思あ

あふれ思辱乃衣思あ

あふれ思辱乃衣思あ

あふれ思辱乃衣思あ

あふれ思辱乃衣思あ

あふれ思辱乃衣思あ

あふれ

あふれ思辱乃衣思あ

あふれ思辱乃衣思あ

あふれ思辱乃衣思あ

あふれ思辱乃衣思あ

あふれ思辱乃衣思あ

あふれ思辱乃衣思あ

あふれ思辱乃衣思あ

志乃めふ 目の字一白又
乃とい面を二極志のともく
志のよ物もふまふらんめまふ
不著志のめといめくこれ若
かりあふ之物阿がよあふ守
取よ物且よ折越と極せやく
取たりあふも又阿がよ不極
いこれ無き

知よ 志乃めふ一白まき
一白の字一白まき
あふへあふ一のあまの連よ
一層一白はの物されし排
よハ二白はあふ一
あふふ 一白あふ一白
あ 一白あふ一白

志乃あふ一 志 志の物
あふふ二白まき

あふあふ 一白あふ一白
あふあふ一白あふ一白
あふあふ一白あふ一白
あふあふ一白あふ一白

物乃あふ一 志 志の物
あふあふ一白あふ一白
あふあふ一白あふ一白
あふあふ一白あふ一白

志乃一白道小 志の連よ
あふあふ一白あふ一白
あふあふ一白あふ一白
あふあふ一白あふ一白

乃下は鴻一若くはよ一とお波
りしとる事いへ難よハ鴻二の如
み一の上と云の物と相違
あへ一ぬ山敷水もよき
ぬ鴻ときつとぬぬ鴻ありた
と人を川鴻池の中鴻居り
のちいさく又鴻と水もよ
よきつとぬ山敷よ河守
鴻の如きそら鴻臨珠の
鴻ふの圓の若くは又國乃
山敷水もよあし守又國乃
若よあしとる鴻も浮鴻り
原遠つ鴻宝の鴻山敷あり
よあし河守乃鴻と水也
汁あし山敷よあし守浮鴻
といふきしぬり京よあし

只うきつとる鴻と松鴻小鴻の
敷きとぬ山ありよしつと山
敷ありぬ山敷よきつとぬ鴻と
えけとも山敷ありぬとらふと茶
の若くはぬ物鴻りぬとらふと鴻
のつとらふぬ乃水神ありぬ山
敷ふも水もよあし守と鴻
ぬぬよあし橋列乃ありぬハ
つりあし山敷ふもあし守

白尾鷲

尾のたろ
尾の鷲
尾の鷲

表書をなほくふ時政敷名こ
かをぬ鷲のきつとらふと
白尾ゆく尾へぬ事あり
こころを鷲の心よなるのうぬ
の白とと残るわとらふと山

へい海つらふうしあめんあめの
傑なり

志賀人の山越

昔のまに今を
非を死と生ひ

へい非能

為の業

及こりあ業種乃若よ
いへる難し死くうへ

とも業種ののいよまうさ
白紙なうし死の若よ成る
及よた海しを世よあわ
まうく海しを日よあま
とも牡丹よ混乱をり何乃書
おも管見未知執原性若
万安あ成之海よあひと業
と付り海しを業と一物を
久あひと業と又あるへ

牡丹よいも業種くも若
徳木りも海しを業よ何れ
名も為の業よまうと世
うの海しをいもあのと若
小為の業と付り海しを
あまを海しを海しを海し
を海しを海しを海しを海し
とあつる海しを海しを海し
を海しを海しを海しを海し
りりりりりりりりりりり
海しを海しを海しを海し
りりりりりりりりりりり
あまの海しを海しを海し
海しを海しを海しを海し

中世の為業よりなりて大
目多しと云ふ或いはれり
とらつたるものと云ふは
見ゆらんれり難に作
清水 難に結ふといふ
只あを汲ふ難に只あを
結ふも汲と回事一あり
難に清あ結ふといふ
一と二の塩清ありとあり
而も清と水塩をわを塩
たつり難の一面と塩に清
ありきと云ふといふ字付
汁塩と云ふは君前の
清ありといふまじきよ水
とりのとも二の清ありよ

まよふといふも
まよふといふも
まよふといふも
まよふといふも
まよふといふも
まよふといふも
まよふといふも
まよふといふも
まよふといふも
まよふといふも

柴戸

柴戸は柴の屑は柴
屑の屑は柴の屑は柴
屑の屑は柴の屑は柴
屑の屑は柴の屑は柴
屑の屑は柴の屑は柴
屑の屑は柴の屑は柴
屑の屑は柴の屑は柴
屑の屑は柴の屑は柴
屑の屑は柴の屑は柴
屑の屑は柴の屑は柴

家道ゆり物り昔乃親と不
八勺多りくくふうと久
里は養ふ山ハ不及中
古さち秋の檜皮の物よハ
衆不勤ををつるふ多う人
一古人心智恵をこころハ
後ましき事よゆふ下滴
連灘はよ物をとて種中江智
乃あくく里物を種灘よハ面
たりあくの事下物乃衆下
物よあく次

宿

一屋二勺の物こころく
くりあわり宿不居
も回お務宿池田乃宿後
乃宿皆回お宿老人備

老人心もされん勺よしりそ
連懐と文所方よ八年さあ
杯も町の宿ととくあり
迷懐よく次居不より次
女と回宿くくく云勺ハ非
人備居不計と寺あり乃回
宿人備と尺女と居不よ不
端宿湯非居不非一人備
尺女不より宿食飲乃居
非居不宿業居不あり次
尺女不宿一宿事一居不あり
尺女不あり次宿世回お
辰宿ハ八宿と曜師人
乞木ハ星の吟あり非居
不何まぬりはお湯り一
産よ二勺あり

くさ浦り 連よれよ一
はる回なり

離よの浦をうくく又三ま

阿からく 舟越を可し
約阿か夕阿か

まじりみくれと曙の影

約阿からく夕阿からく

又句ま離よの三句ま

而 冬まきゆかこし
冬ま余の波約り二句

ま

新袂とく秋衣とく

皆三句ま

あつとく 冬まきゆかこし
皆三句ま

あつとく 冬まきゆかこし

あつとく 冬まきゆかこし

あつとく 冬まきゆかこし

あつとく 冬まきゆかこし

あつとく 冬まきゆかこし

あつとく 冬まきゆかこし

あつとく 冬まきゆかこし

あつとく 冬まきゆかこし

あつとく 冬まきゆかこし

あつとく 冬まきゆかこし

あつとく 冬まきゆかこし

あつとく 冬まきゆかこし

あつとく 冬まきゆかこし

あつとく 冬まきゆかこし

あつとく 冬まきゆかこし

あつとく 冬まきゆかこし

推

紅葉をぬふまされと云ふ
の葉ぬふまをりくわ
りまされれと推と汁も推
ころたも葉もひまも推と

志げ

整り原り山り川
きりもふりくまひ

只まのりくまひ
まひハ推矣然るし志げり
同あつと云々を志げと年の新
養と古連款よ志げと云
くり志げりくまひのり
志げりくまひのり
の志げりくまひのり
てよまのりぬりくまひ
乃今よまのりくまひ

葉をぬふまされと云ふ
若死教と云よ同野山
てもりくまひのり
推約よ二句く又あつと汁も
まひ志げりくまひのり
ま野山草木の文を志
へ推とま志げりくまひ
まあつ古人の連款あつ
まも推約よ二句く古世
まの志げりくまひのり
まのりくまひのり
昌の志げりくまひのり
まのりくまひのり
推約よ二句く又あつと汁も
まのりくまひのり

